

# 岐阜関ヶ原古戦場記念館講演会「石田三成はなぜ関ヶ原へ向かったのか」

2024年6月16日 高橋陽介

## はじめに

近年、慶長五年九月十五日にここ関ヶ原でおこった本戦に関する議論はあらたな展開をみせています。白峰旬氏が「問鉄砲はフィクションである」ことをあきらかにされて以来、本戦に関するふたつの論点「小早川秀秋が裏切ったタイミング」「石田三成が転進した理由」について同氏による新説、高橋陽介（本講演の講師）による新説などがつぎつぎに発表され、従来説はおおむね否定されたかにみえました。しかし藤本正行氏・小池絵千花氏・太田浩司氏が「主戦場は山中である」とする説に否定的見解をしめされたのをはじめとして、笠谷和比古氏・呉座勇一氏・水野伍貴氏が新説を批判する論考を発表されています。今日の講演ではこれら本戦に関する議論の流れを把握したうえで、先述したふたつの論点について、関連する史料を読んでいきましょう。

## 一、研究史の整理

### ①従来説の確認

「九月十四日の夜、西軍の陣営に情報が伝わった。東軍が、大垣城をさしおいて、西上するとのことだった。石田三成らは、大いに驚き、七千五百ほどの軍勢を大垣城にとどめ、石田・島津・小西・宇喜多の隊列を取り、全軍が大雨を冒し、ひそかに関ヶ原に向かって進む。その報告を得た東軍は、直ちに、そのあとを追って、関ヶ原に出た」（旧陸軍参謀本部編『大日本戦史関原役』より抜粋）

従来説は、東軍が大柿を通過して近江方面へ向かおうとしたため、三成ら西軍はそれを阻止するために関ヶ原へ先回りし、これを迎え撃ったとするものである。なお、大谷吉継は、八月四日北ノ庄に、合戦直前の九月十四日には山中村に陣をしいていた。小早川秀秋の所在については八月十七日に近江方面に陣をすすめ、高宮、柏原などをへて、九月十四日に松尾山に入ったものとする。

### ②白峰説の変遷

白峰旬氏はいわゆる「問鉄砲」が江戸時代に創作されたフィクションであることをあきらかにされ(1)、小早川秀秋が裏切ったのは開戦と同時の「巳の刻（午前一〇時ごろ）」であったとされた(2)。石田三成が転進した理由は山中に孤立した大谷吉継を救援するため、その根拠史料は九月十二日付石田三成書状写(3)と九月十七日の吉川広家書状案(4)である(5)。九月十四日の時点で、大谷吉継・小早川秀秋はともに山中に陣をしいていた。本稿ではこれを仮に「白峰A説」とする。のちに同氏は、「三成がもともと小早川勢をうたがっていた」とする九月十二日付石田三成書状写を偽文書であるとし、八月二十九日付保科正光書状(6)をもって、合戦の直前まで小早川秀秋は大柿にいたとされた(7)。「九月十四日夜よりも早い段階で、小早川秀秋は大谷吉継と共に、石田三成などとは別行動で大垣城から出陣して関ヶ原に布陣した(8)」とするものである。本稿ではこれを仮に「白峰B説」とする。

(1) 白峰旬「フィクションとしての「問鉄砲」（パート1）—家康神話創出の一事例（その2）—」（『別府大学紀要』五四号）、二〇一三年。白峰旬「フィクションとしての「問鉄砲」（パート2）—家康神話創出の一事例（その2）—」（『別府大学大学院紀要』一五号）、二〇一三年。

(2) 白峰旬『新解釈 関ヶ原合戦の真実 脚色された天下分け目の戦い』、宮帯出版社、二〇一四年。

(3) 『古今消息集』所収。

(4) 『吉川家文書之二』九一三号。その内容から九月十七日、大坂にいる毛利輝元へ宛てたものと考えられる。

(5) 白峰旬「関ヶ原の戦いにおける吉川広家による「御和平捏造のロジック—『吉川家文書之二』（大日本古文書）九一三号～九一八号文書、及び、「（慶長五年）九月二〇日付近衛信尹宛近衛前久書状」の内容検討—」（『愛城研報告』一九

号)、二〇一五年。

(6) 黒河内長三宛と、松沢喜左衛門尉・丸山半右衛門尉・吉川織部佑宛の二通。それぞれ江戸と、下総多胡の家臣に宛てたもの。

(7) 白峰句『新視点 関ヶ原合戦』、平凡社、二〇一九年。

(8) 前掲註(7)、二五〇頁。

### ③高橋説の変遷

高橋陽介(論者)は白峰A説を肯定的に検証したうえで、『慶長年中ト斎記』の記述(9)がただしいという仮説のもと、九月十二日付石田三成書状写と吉川広家書状案の解釈を再構築。小早川秀秋が裏切ったのは開戦直前の九月十四日であり、石田三成が転進した理由は「小早川秀秋を成敗するため」であるとした(10)。したがって戦闘開始は十五日の早朝。またこの場合、九月十四日の時点で大谷吉継は大柿に、小早川秀秋は山中にそれぞれ陣をしいていたこととなる。のちに論者は西軍の布陣位置をあきらかにし(11)、「小早川秀秋が裏切ったタイミング」と西軍の壊滅は無関係であることを指摘した(12)。

(9) 徳川家康に随行していた侍医・板坂ト斎による後年の記述。「此時備前中納言・小西摂津守・石田治部少輔、大柿を出て関原へまいられ候由、子細は筑前中納言むほんど風聞候、仕置いたすべきとて出られ候」とある。

(10) 高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い(改訂版)』、ブイツーソリューション、二〇一七年。

(11) 高橋陽介「関ヶ原新説(西軍は松尾山を攻撃するために関ヶ原へ向かったとする説)に基づく石田三成藤下本陣比定地「自害峰」遺構に関する調査報告」(『城』二二四号)、二〇一七年。

(12) 高橋陽介『関ヶ原合戦の経緯』、ブイツーソリューション、二〇二二年。

### ④新説に対する批判

新説に対する批判は、まず「主戦場はどこだったのか」という議論からはじまった。

藤本正行氏は「主戦場は関ヶ原ではなく山中であった」とする白峰氏の説(白峰A)に疑義を呈された(13)。白峰氏はこの批判に対し、「関ヶ原」と「山中」の呼称は使い分けられているとして反論(14)。さらに、関ヶ原合戦は「最前線で徳川家康方軍勢が大谷吉継隊を攻撃し、家康方軍勢と小早川秀秋の軍勢の挟撃によって大谷吉継隊が壊滅した関ヶ原エリアでの戦い」と「家康方軍勢の主力が山中エリアに布陣した石田三成方軍勢の主力本隊を正面から先制攻撃し、即時に追い崩した山中エリアでの戦い」から成るとの説(白峰B)を提唱された(15)。藤本氏は「大谷吉継は九月十四日の夜山中に着陣した」とする白峰氏の説(白峰B)に疑義を呈された(16)。「十月七日付本多正純宛池田照政書状」の解釈については後述する。

小池絵千花氏はこの論争について「関ヶ原と山中は明確に区別されていなかった」とする藤本氏の説を支持したうえで、合戦から近い時期に書かれた『内府公軍記』の記述に着目。西軍諸将の布陣位置を以下のように推定された。石田三成隊・島津義弘隊・小西行長隊は小関近辺に南東向きに布陣。宇喜多秀家対は山中に、西北の山を背後に南東向きに布陣。戦闘開始後は川を越えて北野へ展開。大谷吉継隊は合戦前日時点で既に山中に布陣。西北の山を背後に南東向きに布陣。戦闘開始後は川を越えて北野へ展開。脇坂安治・朽木元綱・小川祐忠・赤座直保隊の具体的な位置は不明。小早川秀秋は大谷隊後方の山地、とするものであり、これらの布陣はおおむね従來說に近い(17)。

太田浩司氏は白峰説(A・B)、高橋説に詳細な検討を加えたうえで、「西軍の石田三成は、東軍が中山道と北国街道を通り、佐和山城から京都・大坂を直接攻撃するという情報を得たので、大垣城から出て関ヶ原に布陣した」「西軍布陣は、通説通りとみたほうがよいし、石田三成は笹尾山に陣して、北

国街道を進み近江侵攻を目指す東軍と交戦した」と結論づけられた。小早川秀秋が裏切ったタイミングについては「戦闘の開始から小早川の離反は少々時間差があった」とする可能性を指摘しつつ、「開戦から離反まで四時間かかったという時間差は誤りで、家康による『問鉄砲』もなかった」とされた(18)。

笠谷和比古氏は「問鉄砲」は実在したとして一連の新説の流れを批判された。同氏は『備前老人物語』を根拠とし、誤射の体裁を装うという抑制された形での警告射撃ならあり得ると指摘、「後世、家康側からの警告射撃に促されて秀秋が進撃したという話が独り歩きすることによって、家康の鉄砲部隊が松尾山山頂めがけて一斉射撃したという華々しい話へと肥大化していったものであろう」と推測された。また、「関ヶ原合戦の開始時刻については、諸種の史料を総合的に勘案するならば、だいたい午前八時頃であったかと思われる」とし、白峰A説に否定的見解をしめされ、本戦の展開は「井伊直政による抜け駆け」から「島津勢による敵中突破」にいたるまで、おおむね従來說どおりであると主張された(19)。

藤本正行氏は、「西軍は小早川秀秋を成敗するために山中へ向かった」とする高橋説について、「戦いの始まる前の段階で、小早川秀秋の行動に不審があったとしても、小早川勢が実際に攻撃してきたわけではない。その時点で小早川秀秋を敵にまわせば、敵の兵力を増大させることになるし、有力な味方が裏切ったことを明らかにすることで、全軍の士気が低下するのは目に見えている」「秀秋に不審があっても、小早川勢が実際に攻撃してくるまでは、石田方はそれに対して明確な戦闘態勢を取らなかった」として疑義を呈された(20)。なお、小早川秀秋の裏切りが明らかになってから、石田三成が攻撃の決断をくだすまで、どのような交渉がなされたかについては後述する。

呉座勇一氏は、「小早川秀秋が十四日の時点で西軍を裏切り、西軍が小早川討伐(大谷救出)のために関ヶ原へ移動した」とする白峰A説・高橋説について、「常識的に考えても、十四日の段階で小早川秀秋が旗幟を鮮明にするのはリスクが大きすぎる。東軍との合流前に、西軍に包囲殲滅される恐れがあるからである」とし、「やはり秀秋の寝返りは開戦後と見るべきではないだろうか」と指摘された。そのいっぽう、「問鉄砲」「井伊直政による抜け駆け」など本戦開始の経緯に関する笠谷氏の批判については「妥当ではない」との見解をしめされた(21)。

水野伍貴氏は、小早川秀秋が裏切ったタイミングについて、戦闘が早朝から行われていたことから白峰A説が成立しないとする笠谷氏の説を支持、小早川秀秋は午前十一ごろ霧が晴れて視界を得たために西軍の陣地へ攻め掛かったものであるとし、「従来どおり、序盤において西軍の善戦があり、小早川秀秋の寝返りによって形成が動いたのである」とされた。また、石田三成が転進した理由について「西軍の関ヶ原転進は小早川秀秋の逆意が明らかとなったことによるとする説は成り立たない」とし、西軍の布陣位置については「『日本戦史の図』が歴史的根拠のない布陣図とする評価は改める必要があるだろう」とされた。水野氏は本戦の展開は「井伊直政による抜け駆け」から「島津勢による敵中突破」にいたるまで、おおむね従來說どおりであったと主張される(22)。

野村玄氏は、「小早川秀秋は九月十四日以前に大柿から山中へ移動した」「十五日の未明に、小早川秀秋勢は当初から行動し、大谷吉継勢を撃破した」として白峰B説をおおむね踏襲。また、小池氏の説を批判し、その主戦場によって合戦の名称を「関ヶ原・山中の戦い」とあらためるべきであると主張された(23)。

なお「玉城は豊臣秀頼をむかえるための本陣である」とする千田嘉博氏の新説については、本稿の

テーマであるふたつの論点に関するものではないため、別の場所で論じさせていただく。

- (13) 藤本正行「関ヶ原合戦の松尾山城と大谷吉継の陣営」（『中世城郭研究』二九号）、二〇一五年。
- (14) 白峰旬「関ヶ原の戦い（本戦）をどのように考えるべきか」（『愛城研報告』二〇号）、二〇一六年。
- (15) 白峰旬「関ヶ原の戦いにおける石田三成方軍勢の布陣位置についての新解釈—なぜ大谷吉継だけが戦死したのか—」（『史学論叢』四六号）、二〇一六年。
- (16) 藤本正行「一次史料への信仰—家康が関ヶ原の戦いの晩に泊まった場所について—」（『中世城郭研究』三一号）、二〇一七年。
- (17) 小池絵千花「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」（『地方史研究』四一一号）、二〇二一年。
- (18) 太田浩司「慶長五年九月十五日に何が起きたか—「関ヶ原合戦」当日の再検討—」（太田浩司編『石田三成』）、宮帯出版社、二〇二二年。
- (19) 笠谷和比古『論争 関ヶ原合戦』、新潮選書、二〇二二年。
- (20) 藤本正行「常識で読む関ヶ原合戦」（『中世城郭研究』三六号）、二〇二二年。
- (21) 呉座勇一『動乱の日本戦国史』、朝日新書、二〇二三年。
- (22) 水野伍貴『関ヶ原合戦を復元する』、星海社新書、二〇二三年。
- (23) 野村玄『新説 徳川家康』、光文社新書、二〇二三年。
- (24) 千田嘉博「戦国の戦乱二」（『新説 戦乱の日本史』）、SBクリエイティブ、二〇二一年。

## 二、関連する史料を読む

以下、「西軍は小早川秀秋を成敗するために山中へ向かった」とする高橋説を前提として、関連する史料を読んでいきたい。

### ①九月十四日、大谷吉継は山中ではなく大柿（楽田）にいたとする根拠史料

【史料1】「水野日向守覚書」より抜粋

大垣の近所にかくでんと申在所御座候、是に嶋津陣をとりいられ候、松下石見そねにいられ候  
ついて嶋津かたよりあしかるを出し、鉄砲足軽久しく仕候、そねの町はつれに鉄砲かまへ御さ  
候、それまで嶋津おしこみひきさまにりやうけと申在所ハそねの近所にて御さ候、それに火を  
かけ候てかくてんへうち入申候、

そねへまいり候日の八つ時分にかくてんより又鉄砲のものをいたし、二時計てつほうあしかる  
仕候所に、嶋津かくてんの在所にたかくやくらをあげ、ざいをふり候へハ、そのさいを見かけ  
鉄砲あしかる共皆在所へ引入申候、此人数ハ此まへのはたらきとハちかい候まへ、早々うち入  
候へのよし被申付引入申候よし、委事ハ在所の庄屋、百性物かたり仕候、

同じき晩にいな図書嶋津取次にて候、嶋津ハさためて権現様へ御如在ハあるましく候間、図書  
罷越、其通嶋津へ可申候由にて御使に被参候、いろ／＼才覚仕、かくてん嶋津へつかい申度と  
仕候へとも中々所のものも行かよひも不罷成候と申、図書もかくてんへこし候事不成、赤坂へ  
こし被申候、

（合戦前、島津維新・忠豊は大柿の北方にある楽田という場所に陣をしいていた。）

【史料2】「宮之原才兵衛書上」（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺記録所史料一』六八頁）

大谷刑部少輔殿一所に\_\_御陣取被成候、然に筑前中納言一揆被起\_\_内府様方に被差出之由、九  
月十四日に大柿江相知れ申候事、

（忠豊の家臣の証言によると、大谷吉継は島津勢とおなじ場所に陣をしいていた。「小早川秀秋が裏切った」という情報は九月十四日にもたらされている。）

【史料3】十月七日付本多正純宛池田照政書状（『士林浜洄』）

態申入候、石川備前儀、最前犬山を相渡、大柿へ可罷出由之処、我等以才覚山中へ廻申候、然  
者九月十四日之夜、大谷刑部少陣取へ相着申候処、明十五日未明御一戦にて被仰付、備前調義  
に不及仕合に候、別に曲事御座候而之儀に候はゞ、不及是非候、上方へ相廻申候事は、我等調  
之儀に遣申候条、此一ヶ条之事は、被仰分可被下候、為其申入候、恐々謹言、

十月七日 羽三左衛門尉  
本田上野介殿  
上る 人々中

(合戦前、池田照政は石川光吉に「西軍とともに山中へ向かうように」と指示。九月十四日の夜、池田勢は楽田の前面に布陣。しかし十五日の未明に山中方面で「御一戦」があったため、内通工作は不調となった。ただし、白峰旬氏・藤本正行氏、小池絵千花氏・太田浩司氏はいずれも「大谷吉継が九月十四日山中にいたこと」の根拠史料とされている。)

### ②九月十四日、西軍から小早川秀秋に対する交渉

【史料4】「井上主膳覚書」(『旧記雑録後編三 卷五二』一四〇七号)より抜粋

- 一、ヶ様之首尾二而、九月十三日二屋前二被成御着、応而何れもの人数茂参着候事、
- 一、石田治部少輔殿より御使者二而、上洛大儀、万事被成御頼候由二而、金之軍ばいうちわを調置候御持参候事、
- 一、其晩に薪少茂無御座候故、中間衆取二参候得共、少も無之由二而罷帰候、就其我等右之衆召列又々参候へ共、何二而も無之、つゝしかふを引こやし罷帰、漸々陳屋に火を焼候事、
- 一、其後陣中兵糧有之哉与御尋候へ者、無御座よし申候二付、何れもに御談合被成、夜中に田地之稻等を取入可申与被仰付、諸侍衆も何れも稻を手自被成御持候、十四日之晩迄其通二御相談二而候、拾三日より雨ふり、四日之夜者大雨二而、殊之外寒く御座候て、長寿院・平左衛門殿杯茂稻こつみに火を付、御あたり被成候事、
- 一、ヶ様之談合最中に、筑前中納言殿野心之よし注進候、就夫石田治部少輔殿方者、川上四郎兵衛殿御談合、御使者二御出之由承候、後二軍評定二、中納言殿を呼入候て質に御取可有与、大将衆御内談候得共、風氣之よし二而御出無之よし承候、其時中納言殿者若年二而、家老之計事与風聞仕候事、
- 一、翌日未明に御備御座候、\_\_殿様御具足・羽織・御甲被成御拝領二而候、是者太閤様より\_\_惟新様江御拝領之御羽織与承候、むりやうに大き成鳳凰之縫白く二而候、御難儀二候ハ、我等御名字を授り、御名代二可罷立よし御申上候事、
- 一、中務様者別備二而御座候、彼手二御参被成、馬上より被成御暇乞、中務様被仰候者、今日者味方よわく候へ者、今日之鍵者つけましそ迎、互に御笑い候事、

(島津家家臣・井上主膳は九月十三日、大柿に到着した。大柿では食料も薪も不足していた。九月十四日の夜、小早川秀秋が裏切ったという注進がはいり、大柿で軍議がおこなわれた。島津家からは川上忠兄が参加。軍議の内容は、秀秋を大柿へ呼び入れ、人質として取ろうというものであったが、秀秋は風邪をひいていると出してこなかった。西軍は小早川秀秋が裏切ったと聞いて、すぐに攻撃に向かったわけではない。)

### ③吉川広家書状案の解釈

白峰旬氏・高橋陽介(論者)・太田浩司氏・水野伍貴氏は、「吉川広家書状案」の検討をおこなった。「吉川広家書状案」は九月十七日に、広家が大坂にいる毛利輝元へ送った書状であり、関ヶ原合戦の詳細が書かれている。(これは日本語の特徴でもあるが)主語が省略されたあいまいな表現が多いため、前提条件によってどのようにも解釈できる史料といえる。この書状の解釈をめぐる論点について考えてみたい。

【史料5】吉川広家書状案(『吉川家文書之二』九一三号)より抜粋

追々致言上候、今度忽御和談之事、其許相伺候而可相調事候つれ共、敵之手前先書二如申上候、内府着二付而、至青野ヶ原、悉先陣衆ハ打出、最前陣所へ者内府被入移候、左候て行之様子相聞え候分ハ、人数二手二分候而、一手ハ山中へ押入、左候へは筑中御逆意はや色立仕合

候、就其大柿衆も、彼地被居候事不成候而如山中、大刑少陣無心元之由候て、被引取候、是ハ佐和山へ二重引可仕覚悟と相見え候、さ候へは御弓鉄御味方とゞ被出候■衆■衆ハ、多分心合之様子と相聞え申候、其地被罷居候衆も、使者付置候ハぬかたハ、多も無之由候、一つとしてはや御弓矢勝手ニ可成立ふり無御座候、此時者、数代之御家をむさむさと可被相果事、余残多存、長大、長老其外之衆へも不致談合、兩人短息之余、別ニ伝無之候条、黒田甲斐所へ広家内三浦と申かち者を、状をも不持せニ遣惣和談之手筋、可有如何哉と計申遣之候へは、黒甲福左へ談合候て、即内府御陣所へ使召連被参、井伊兵部、本多中書被引合せ候て、内府御対面被遂被露候、

白峰旬氏による解釈、現代語訳（白峰2015）

「追々（重々）言上する。一、この度の「惣御和談」のことは、そちら（大坂城にいた毛利家の重臣と思われる）へ伺って（最終的に）調ったが、敵の手前は先書に申し上げたごとくである。家康が（こちらに）着いて、ことごとく先陣衆は青野か原に打ち出し、最前の陣所（岡山の本陣のことか）へ家康が移って入った。（そして、「行（てだて。軍事行動という意味）」の様子が聞こえている分は、（家康方の）人数を二手に分けて、一手は山中へ押し入り、小早川秀秋は、そうなると）ところが、小早川秀秋は、「御逆意」が早くもはっきりとした状況になった。それにつき、大垣衆（大垣城に籠城していた石田三成など）も（かの地（大垣）にいることができなくなり）山中へ行き、大谷吉継の陣が心元ない、とのことで、（大垣城から石田三成などが）退いたのである。これは佐和山へ二重（番）引をする覚悟（は眼前であり、そうなると御弓・鉄（「砲」脱力））と見えた。総じて、（家康の、或いは、石田三成の）御味方として出た■衆、■衆は、おそらく「心合」の様子と聞こえた。その地にいる衆も、使者を付け置かない方（衆）は多くもない、とのことである。一つとして早くも（御弓矢が）御勝手に成り立つべき様子はなかった。」

高橋陽介（論者）による解釈、現代語訳（高橋2017）

「追って申し上げます。総和談の事は、本来毛利輝元様に伺ってから調えるべきだったのですが、敵である西軍の状態は先の手紙に書いたとおりです。徳川家康が到着しましたので、東軍の先陣衆はことごとく青野ヶ原へ打ち出し、東軍の先陣衆がそれまでいた陣所へは徳川家康が入りました。そうして西軍の手立ての様子を伝え聞いたところでは、西軍は人数を二手に分けて、その一手である宇喜多・島津・小西・石田らは山中へ攻め込んだということです。そうなると小早川秀秋の逆意は明白になりました。それにつき大柿にいたものたちも、そこにいることができなくなって、大谷吉継は西軍が心配であると言って、山中へ向かって撤退して行きました。これは佐和山へ二重引きをするつもりだったのだと思います。そうなると事前に東軍と打ち合わせしていた■衆、■衆らはほとんど合意をしたということです。大柿に居たものたちも、東軍に使者を送らないものはほとんどいなかったということです。もはやまったく合戦にはなりませんでした。」

水野伍貴氏による解釈、現代語訳（水野2023）

「このたびの惣和談（東軍と毛利の和陸）のことは、そちら（大坂の毛利家重臣）へ伺ってから調える

べきでしたが、敵の動きは先書で申し上げたとおりです。内府（家康）が到着したことで、先鋒の衆（豊臣系大名）は青野ヶ原（大垣市青野町）へ移動しました。先鋒の衆が使っていた陣所に内府が入りました。（見せ消ち：そして敵の動きについて聞こえてきたのは、軍勢を二手に分けて、一手は山中（関ヶ原町山中）に攻め入り、筑中（秀秋）はそうなる）ところが、筑中は早くも逆意を明らかにしました。それにつき、大垣の衆（三成ら）も（見せ消ち：かの地（大垣）に居られなくなり）大刑少（吉継）の陣が気がかりとのことで、山中へ向かって引き揚げました。これは佐和山へ二重（見せ消ち：番引きをする心づもりである（見せ消ち：と眼前に見ました）と見えました。（見せ消ち：そうなる）戦）およそ、味方として出陣した■衆■■衆（三文字、黒塗り）は、おそらく（東軍に）同心していると耳にしました。その地（大坂）に居る衆も（東軍へ）使者を送らない方（見せ消ち：衆）は多くないとのことです。一つとして早くも（見せ消ち：戦）御勝手が成り立つ様子はありませんでした。」

太田浩司氏による解釈、解説（太田2022）

「本書状は、関ヶ原合戦を「一昨日」としているの、九月十七日に作成された文書で、南宮山に陣した吉川広家が、合戦の状況を主君の毛利輝元に報告するために記された覚書とみられる。この覚書の中で、合戦となった場所を「青野か原」と言っている。これは、先の近衛前久書状と同じで、遠方から来た武将たちにとって、南北朝の激戦地「青野か原」と関ヶ原の区別が明確につかなかったことによるものであり、合戦が展開した関ヶ原を全体的にとらえた地名と見られる。注目すべきは、見せ消ち部分に当たるが、東軍は軍勢を「二手」に分けたと記し、その一手が「山中」に押し入ったとしている点である。この押し入った軍隊が、徳川家康が主力と判断していた福島正則と黒田長政の軍で、最初の「（中略）」後の両使（福島と黒田からの使者）の返答によれば、さらにそのあとから加藤嘉明と藤堂高虎が続いたとされる。さらに、本書状では合戦後の十六日、近江へ攻め入る際にも、二手に分かれて「乱入」し、吉川は「北口之手」を任されたと記す。この「二手」に分かれての近江侵攻は十六日の話だが、十五日の「二手」と同じ道筋を指すのではないだろうか。その一方が、中山道が通る山中村であれば、もう一方の「北口之手」は、関ヶ原宿から別れた北国街道が通る小池村とみるべきだろう。」

【史料5】吉川広家書状案（『吉川家文書之二』九一三号）より抜粋

爰元御行之様子如何候哉と両使へ相尋申候処、両使申事二八、山中へ之先手ハ、福左太、黒甲、其外加左馬、藤佐、其外上より罷下候衆中、筑中納言殿御手引之事二候条、打合中二たて候て可討果候、南宮山への手あてハ、先手池田三左衛門尉、井伊兵部、本多中書、其外内府馬廻此衆にて候、

白峰旬氏による解釈、現代語訳（白峰2015）

「（このうえは）、こちらの「御行（てだて。軍事行動という意味）」の様子はいかがかと、両使（二人の使者）へ尋ねたところ、両使（二人の使者）が言うには、山中への先手は、福島正則、黒田長政であり、そのほか加藤嘉明、藤堂高虎（そのほか）上（方）より（上杉討伐のため東国に）下った衆中が

小早川秀秋に（裏切りへの）「御手引」をしたので、（石田三成方部将の家康への）（内応）中に（家康への内応工作を）中止して、（敵を）討ち果たそうとした（合戦をおこなおうとした）。南宮山への（対応として）配置された（家康方の軍勢）は、先手の池田輝政、井伊直政、本多忠勝、そのほか、家康の馬廻（など）がこの衆であった。」

高橋陽介（論者）による解釈（高橋2017）

「この上は、『東軍の手立ての様子はどうだったのですか』と尋ねましたところ、二人の使者が言うことには、山中への先鋒は福島正則、黒田長政、そのほかに加藤茂勝、藤堂高虎、そのほか上杉征伐に加わった諸将たちで、小早川秀秋の手引きであるので、小早川と宇喜多・島津・小西・石田らの戦っているところへ仕掛けて合戦となりました。南宮山への抑えは、先鋒池田照政、井伊直政、本多忠勝、そのほか徳川家康馬廻り衆でした」

水野伍貴氏による解釈（水野2023）

「（見せ消ち：この上は）、こちら（東軍）の動きは如何かと両使に尋ねたところ、両使が申すには、山中への先鋒は福左太、黒甲、そのほか加左馬（加藤嘉明）、藤佐（藤堂高虎）。（見せ消ち：そのほか）上方から下った衆が筑中納言（秀秋）を（寝返るように）手引きしたので、（見せ消ち：合戦）中に寝返り（西軍を）討ち果たすとのことです（見せ消ち：合戦するとのことです）。南宮山の抑えには、先鋒に池田三左衛門尉（輝政）、井伊兵部、本多中書、そのほか内府の馬廻衆がおります。」

### 三、石田三成はなぜ関ヶ原へ向かったのか

（白峰旬・野村玄）「石田三成は大谷吉継を救援するために関ヶ原へ向かった。小早川秀秋は山中における戦闘が開始されると同時に裏切って大谷隊の背後へ攻め掛かった」

（高橋陽介）「石田三成は小早川秀秋を成敗するために関ヶ原へ向かった。西軍が小早川秀秋の裏切りを知ったのは合戦の前日である」

（藤本正行・太田浩司・笠谷和比古・水野伍貴）「石田三成は東軍を迎え撃つために関ヶ原へ向かった。小早川秀秋は合戦の途中で裏切り、西軍は敗北した」

### むすびにかえて

二〇一〇年代なかばに白峰旬氏・高橋陽介（本講演の講師）らによって提唱された新説は、およそ一〇年の歳月を経て、多くの支持者を得るいっぽう、従來說を支持する研究者からの強力な反論にさらされ、関ヶ原本戦に関する議論はさらに活況を呈しています。議論が今後どのような展開になるか、興味のつきないところです。従來說でいちど関ヶ原町をたずねられたことのある歴史ファンのみなさまは、あらためて新説で主戦場周辺をまわってみられてはいかがでしょうか。いくつかの発見があるはずです。関ヶ原本戦に関する議論の活性化は、ここ関ヶ原町の観光にも寄与できるものであると考えております。本日はご清聴ありがとうございました。